

「療育に來たら子どもの表情がちがうんです！」と話すお母さんの顔は、今までの切羽詰った雰囲気からは想像できないほど明るいものでした。療育に通い始めて1ヵ月もたっていないのに、お母さんも実感するほど子どもの変化が現れるのです。まるで魔法がかかったように……。そこには長年培ってきた療育の基本が、子どもの発達を保障してくれています。

療育とは何か、療育の目的や実践の基本と療育者に求められる専門性について考えます。

どうなりたいのか。

「保育」や「教育」はなじみがありますが、「療育」は聞きなれないことばです。保健センターや保育園などから「通ってみませんか」と勧められたお母さんも、一体どんなことをするのかわからず、最初は不安でいっぱいだったと話されます。そして、実際に通い始めて、訓練でもない、治療でもない療育の力を実感し、冒頭のことばになるのです。

障害や発達に弱さをもつ子どもたちは、自分の力で遊ぶことや生活をコントロールすることが苦手で、大人の支えが必要です。療育とは、発達や障害のことに精通した大人が、子どもの興味や関心に寄り添い、小集団で、ていねいに、焦らず、ゆつくりと働きかける活動だと考えます。その活動のキーワードは、生活、遊び、集団です。

キーワードー 生活

子どもの成長にとって、規則正しい生活は欠かせません。よく眠る、しっかりと食べる、うんちやおしっこができることに始まり、歯磨きや着替えができることは、生活リズムの確立と同じように重要視されます。しかし、障害や発達の弱さがあると、自然にできそうなことに多くの困難を抱えます。夜寝ないで昼夜逆転になる、偏食がひどい、オムツがなかなかとれないなど、生活のしづらさを抱えての子育てはたいへんです。

ママも寝不足になり、作っても食べない子どもにイライラします。外食でも座っていられなくてヒヤヒヤ、乗り物では不安で奇声をあげる、ちよつと目を離れた隙に迷子になってしまうわが子に、困り果ててしまいます。「そのうちできるようになる」と気休めを言われても、「もつときびしくしつけない」とハッパをかけられても、そう簡単に解決するわけではありません。

療育の場では「大丈夫！ ゆつくりと見守りましょう」と将来を見通したアドバイスがもらえます。今厳しくしつけないでも大丈夫だとわかり、焦る気持ちが落ち着きます。